

西山 賀章



あぶり八尾太田において、サブリーダーとレクリエーション委員長を務め、教育部にも所属する西山賀章。眼鏡店と食品会社での営業経験がある。母親の介護から介護職に興味を持ち実務者研修を取得。2016年、株式会社あぶりに中途入社し、3年の実務経験を経て、介護福祉士に合格した。現在まとめ役を担う立場となった西山が目指すリーダー像や仕事に対する思いを聞いた。

相手の立場となり、
視点を変えてみる

普段の主な担当業務は、利用者様の身体介助などの介護業務。これに加え、レクリエーション委員長として催し物の企画を考え準備をしたり、教育部として新入社員の研修を行ったりと、忙しい日々を送っている。

サブリーダーとなり以前よりも意識するようになったのは、相手の目線に立った物の見方だ。職員

をまとめる立場になり、それまで

は気づけなかった部分が見えるようになった。自分が相手の立場ならどう感じるか。これは職員に限ったことではなく、利用者様においても同様だ。

そこには「人を動かす唯一無二の手段は心を動かすこと」という考え方があある。書籍『人を動かす』『アール・カーネギー（著）』を読んで出会った言葉だ。トップダウンで指示を下し、ただ注意をするだけでは、人は自ら動かない。しかし、意義や意図を皆で共有すれば、それぞれが自分自身の問題としてとらえ始める。こうした考え方にもとづき、今後は接遇や教育、あるいは、居室の環境整備などのさらなる改善に、職員全体で取り組んでいきたいと考えている。

理想のリーダー像



理想のリーダー像は、和多田施設長だ。レクリエーションで悩ん

を許容できてしまう。コロナの状況が落ち着いたら、ぜひ叶えたいのが家族旅行だ。

「小さい子どもが遊べて、おいしい蟹料理を味わえるおすすめの旅先があれば、ぜひ教えてくださーい！」

よりよいリーダーとなり、よりよい組織づくりを目指す。飽くなき向上心を胸に、西山はこれからも挑戦を続けていく。

無理なく仕事を分担できる風通

でいれば、アイデアの指針を示してくれる。人手が足りていない部分があれば快く加わり、助けてくれる人だ。困っていればいつでも相談に乗ってくれるなど、受け取った恩を挙げればきりがない。

西山が目指すのも、和多田施設長のように一緒に喜んだり、苦しんだり、様々な思いを皆と分かち合える身近なリーダーだ。後輩たちとは雑談を通して密にコミュニケーションを取り、顔色や雰囲気から心配事や困り事がないかを意識して確認するようにしている。

風通しのよい

職場を目指して



コロナ禍の現在は、レクリエーションの内容も制限されるため、感染防止を考慮した上で実現可能なイベントを模索中だ。企画を後輩に任せるようにしているが、共にアイデアを練ったり、下見に行したりするなどのサポートを欠かさない。

しのでい職場が、西山の目指す組織のあり方だ。そのためには、先輩やリーダーは、問題があればすぐに相談でき、失敗も隠さずに報告できる存在でなければならぬ。そうした頼れる存在を、教育部の活動などを通じて一人でも多く育て、皆で支え合える環境を整えていくつもりだ。

それぞれ勤務時間帯が違いため、悩みや問題には個別に対応しているのが現状だが、職員の皆には業務課題改善ミーティングの場などを大いに活用し、課題として提案してほしいと考えている。皆で問題を共有し、考えて話し合える機会を定期的に設けられるよう、努力を惜しまず取り組んでいきたいという。

ビブリオバトルで
スキルの底上げを

教育部の新たな取り組みとして最近開始したのが、ビブリオバト

家族と過ごす休日



家に帰れば、1歳の男の子のパパだ。歩き始めたばかりの息子はまだ目が離せないため、休日は子守り役に徹する。子育ては大変なこと多いが、とにかくかわいい子どもを目の前にすれば、すべて

